



經典餘師

小學之部

一

口 11
2047
38



2047
38

此書本文は、この書を讀むに用むる讀法と見まはるる文字
を、つらう讀むに註を見まはるる其理自づから意得
まゝしむる學問のつらからざる書也

經典 餘師 小學之部 卷五

文久癸亥再鐫 三書堂梓

序

詩曰靡不有初。鮮克有終。
况不善其初乎。余十數年
前。以和字譯經典數部。使
人易解。盖余少小時家貧。
不暇學問。常以病諸。乃其

經史餘序

所譯為與余同病者曩試
刻一部播布於世方是時
也壯歲虛筓未除妄錄姓
氏今而深悔效顰於名家
然鞭之於馬腹何益矣言
及于此則病於夏畦矣古
人或著書而不載名號者
竊高其志嗚乎余雖不善
其初冀慎其終卒矣維夏
自攝遊于海島及其行也
會書肆盡刻其舊稿雖然
不識其誰某所述則嫌於

御製無尊号者。故書以證
其野人之為云。書蘇蘇

其野人之為云。書蘇蘇
野夫識

蘇蘇其志。余雖不善
入志者書而亦輝。各終

凡例

讀法

一 本文小天命之謂性（上段）讀法知多也。天命之性
と謂とよむべしやあり。又則天明とありと上よハ天明小則と
と出せり。その如く本文を跡へり讀べし。和漢言葉上
下ならたぐひなり。扱字策を以て一字ツ字と撞てよむべし。天
とよむうちハ天字と撞明とよむうちハ明字を以てとて
動べり。べ則との声よりけり時。則れ字をつくなら。一字
の訓をさへやむまゝ。次字へりけり。讀法ある
同たり。上の文字はけりよむべきものといふべし。
一 讀書法ハ初ハ五字十字十五字までより讀べし。一卷も
とて各生付小よりて多少あり。扱全部を讀終て後。左

の註をさくぐ一是儒師の学小異なることれ

一 此書ハ通俗曉やとて必要とするものなり或ハ本文ハ字義と和訓をくちまたとバ倦勞とバ法則とるは類なり或ハ俗語と以て本文ハ意となとくハ商議とつべきを談合とバ適悦とるを心と叶と出たぐひなりその外音義等之を別とてハ樂ハ音樂なり樂ハたのむ樂ハこのむは類いづれもその場所の聞やもさく便なるものなり

一 學問の道とつハ貴賤高下を人々日用におくるハ教ふとて亦ハ善くハ設とむるハあつ仁宗皇帝れ仰よと無學なる人ハ物と比並たつ方なく先けそのよ比とてハ麒麟あり鳥よ比とてハ鳳皇あり糞土よ比とてハ糞ハ五穀をそとて土地ハ民をやとて徳ありとらん仰あり

志うと學問は事とて學あやまる時ハ却て學問は事と人小方と程子の詞も論語よみの論語よまどとハのなほひになり又學問をいとて我顔なるを仙人と唱とて唐土よてむあ隋は煬帝の御代ハ洪水湧出とて帝侍従某と見聞ハ遣召ひ洪水ハいりやう小有とぞと問ふ侍従答く浩とてして天よ滔と山は懷陸地ハ襄とて帝重く民乃啓ハいりやう有とのるま侍従とて百姓ども考妣の喪中は如ならしとぞやりたる是とて書經の辭をとり用たり是より帝も學問の顔先ハ出との心厭ハ思名ハいしはじりやうハ公用をさしれ申して學問辞もとぞ一人おもつて博く書を讀日月ハ重とてハ益とてやうよそののありとぞ是もまご偏倚なることなり一言一句もその

道理の推さへめあは事たりぬべしとてやむりし北條宗雲軍
 師を死しよせ三畧を講べしとてやむりし主將の法ハ務て
 英雄の心を學とてし一はくももや跡ハ聞ふ不及ざりしか
 了とて聖人の御詞も吾道ハ多學で何りと書識おほゆる事
 是非とのまひ

(Faint handwritten text in vertical columns, likely bleed-through or marginal notes)

讀法
 小學に懸す

題小學

題の書と輯ちりし義大畧とあらに題
 辭の義りし題の辭前後に二あり
 例なり

古者小學教人以灑掃應對進退之節

愛親敬長隆師親友之道皆所以爲

修身齊家治國平天下之本

起と述たまふなり古昔聖人の御代ハ大學
 校小學校といふ所の學校所ありて八歳
 十四歳まで上ハ天子諸侯より下ハ士庶に
 至りて皆あれ形へりて學とてその教
 貴人ハ堂上中庭の掃除又ハ水とて人の應
 貴人へけふの道と見え入りて人の應
 身の進退とて節の義に遵やふの義師
 長上の人と敬恭兩親と愛敬ふすの義師

古者小學にて
 人と教ふ灑
 掃應對進退
 之節親と愛
 長と敬し師
 と隆と友に親
 む之道と以て
 皆身と脩家と
 齊國と治り天
 下と平にす之
 本と爲所以に

而して必ず其

時に習使其

格不勝之患

今其全書見可

者亦多讀

未始不可行也

莫之知其無古今之異者

今頗蒐輯以為此書授之童蒙資其

講習庶幾有補於風化之萬一云爾

於此書

童蒙に授て其講

習と資庶幾ハ

風化之萬一に

補ひ有る爾云

於此書

童蒙に授て其講

習と資庶幾ハ

風化之萬一に

補ひ有る爾云

於此書

の教とたゞし、朋友とて、心むの道等、
小學の教あり、凡て出生より七十まで、
國天下と治平にす、則ち此と本とする

而必使其講而習之於幼穉之

時欲其習與智長化與心成而無扞

格不勝之患也 右の教と知、少きより講

今其全書雖不可見而雜出於傳記

者亦多讀者往往直以古今異宜而

未始不可行也 今の世、
多し、
の異なり、
に致し、
に於て、
聞くに、

莫之知其無古今之異者 同

今頗蒐輯以為此書授之童蒙資其

講習庶幾有補於風化之萬一云爾

於此書 童蒙に授て其講 習と資庶幾ハ 風化之萬一に 補ひ有る爾云

淳熙丁未三月朔旦

淳熙丁未三月朔旦

淳熙八年号の名

晦菴題す

晦菴題

宋の大儒晦菴先生姓朱氏...

又考亭より、率て謚号と朱文公と

小學題辭

小學題辭

是首にあり題辭と並に

元亨利貞
天道之常

元亨利貞天道之常

元とて一年の始り

仁義禮智
人性之綱

人性之綱

仁義禮智

經典餘師

小學卷之首

三

惟聖斯側。學
建師立以
其根。培以
其枝。達其

居之。惟聖斯側。建學立師。以培其根。以達其枝。之に由りて聖人も側。建師範の教を建たす。

小學之方。灑
掃應對。入
孝出恭。動
罔或悖。行
有餘力。誦
詩讀書。詠
歌舞蹈。思
罔或逾。

灑掃應對。入孝出恭。動罔或悖。行有餘力。誦詩讀書。詠歌舞蹈。思罔或逾。心根を培ふ。その支業と正直に引達たすなり。

窮理修身。斯
學之大。明
命赫然。罔
有內外。有
餘。

窮理修身。斯學之大。明命赫然。罔有內外。有餘。天下の理と窮。皆身と修。天下國家と治。の道。

乃復其初。昔
非不足。今
豈有餘。

乃復其初。昔非不足。今豈有餘。初。初。人生の時。昔者。生。

德崇業廣。乃
復其初。昔
非不足。今
豈有餘。

德崇業廣。乃復其初。昔非不足。今豈有餘。初。初。人生の時。昔者。生。

世遠人亡。經
殘教弛。蒙
養弗端。長
益浮靡。鄉
無善俗。世
乏良材。利
欲紛拏。異
言喧嘩。

世遠人亡。經殘教弛。蒙養弗端。長益浮靡。鄉無善俗。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。世遠人亡。經殘教弛。蒙養弗端。長益浮靡。鄉無善俗。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。

歷子之。人亡。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。

歷子之。人亡。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。歷子之。人亡。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。

內外。有餘。

內外。有餘。天下の理と窮。皆身と修。天下國家と治。の道。

乃復其初。昔非不足。今豈有餘。

乃復其初。昔非不足。今豈有餘。初。初。人生の時。昔者。生。

德崇業廣。乃復其初。昔非不足。今豈有餘。

德崇業廣。乃復其初。昔非不足。今豈有餘。初。初。人生の時。昔者。生。

世遠人亡。經殘教弛。蒙養弗端。長益浮靡。鄉無善俗。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。

世遠人亡。經殘教弛。蒙養弗端。長益浮靡。鄉無善俗。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。世遠人亡。經殘教弛。蒙養弗端。長益浮靡。鄉無善俗。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。

歷子之。人亡。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。

歷子之。人亡。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。歷子之。人亡。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。

內外。有餘。

內外。有餘。天下の理と窮。皆身と修。天下國家と治。の道。

乃復其初。昔非不足。今豈有餘。

乃復其初。昔非不足。今豈有餘。初。初。人生の時。昔者。生。

德崇業廣。乃復其初。昔非不足。今豈有餘。

德崇業廣。乃復其初。昔非不足。今豈有餘。初。初。人生の時。昔者。生。

世遠人亡。經殘教弛。蒙養弗端。長益浮靡。鄉無善俗。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。

世遠人亡。經殘教弛。蒙養弗端。長益浮靡。鄉無善俗。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。世遠人亡。經殘教弛。蒙養弗端。長益浮靡。鄉無善俗。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。

歷子之。人亡。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。

歷子之。人亡。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。歷子之。人亡。世乏良材。利欲紛拏。異言喧嘩。

讀法

小學卷之一



立教第一

子思子曰天命之謂性性之謂道道之謂教

五典餘市

小學卷之一

古昔男子ハ幼少ナリ小學校へ入てこの書に載る所れ道と學とあり又

大學校の教と天子諸侯大夫たる人の國家に政務に與る所と習する所と是大學小學の分あり

内篇

上卷に記す教と立る本なる故に内と外と名づくをわく是内外の篇の義あり

立教第一

誠教と云ふ所の多禽獸のあまひに似たるもの多

たり聖人これと憂ふて教と立るものあり凡て世人學てのら道と知れし恥と云ふは

子思子曰天命之謂性性之謂

道道之謂教

性ハ和謙むまれば血氣あり人子不限そきて生て血氣あり

りれその生るは天より受得たる性のそありてなり幼少子よると父と云ふ母を云ふと心す

小學卷之一

天明に則り聖法に遵ぎ此篇と述て師爲者と教ゆる所以と知而して弟子に學所以と知俾

列女傳に曰く古者婦人子

と妊めり

寢に側と不坐すに邊と不立に躡らせ不邪味と食せ不割正不食不席正不坐目邪色と視不耳に淫聲と聽不夜ハ則ら瞽として詩と誦正事と道令

かに直るるりれある或馬れ性い之に乗中く牛れ性耕に用中く皆かくのどく自然と生ほくして天とこの性命あり理ありはて人ある者の道にそむける性の変なり人の性善なるものして悪るものなり即ち本心れど性ハ天の命ありてその性たまに率ぐふと道とふよりその道とさうきまると條とくいて是聖人れ立る所の教といよりのなりとと則天明

遵聖法述此篇俾爲師者知所以

教而弟子知所以學 天より善なるもの

らうに命たより理つたるありて之と則とて聖人の法に遵ぐひその教と此篇に之を述て叔師匠人に教弟子ハ之と學といよ所以とさるにほけあらしむ

列女傳曰古者婦人妊子 列女傳ハ劉向

にて古ハ名ある女の事と列女傳ハ書なりそれ中ハ曰く古者ハ女子嫁入とありて人の婦とかりて懐妊の覺ありてより作法うるなりとこれ教をさすことなり生る子の人ごとくさるひやまをさたり又心得あれ不孝なる子といふ有べしと思われとて聖人 寢不側

坐不邊立不蹕不食邪味割不正不

食席不正不坐目不視邪色耳不聽

淫聲 夜にいつく寝時ハその身乃をぐと側み致そ

居べくしに耳目淫邪なる 夜則令瞽誦詩

道正事 夜ハ瞽者ハ詩と誦とて聽べしとて

食必後長者始教之讓

九年教之數日

十年出就外傅

計衣不帛襦袴禮師初朝夕學幼儀

十有三年樂

二十而冠始

食必後長者始教之讓

八歲に及ぶると少く門戸の出入りも坐席ふ郎のとも又ハ飲食に望むと必て長者の人より身と引さけて後にさす

九年教之數日 九歳にも至れば十一支と十干との配分等と教べし今日甲子明日乙丑をりるをて外四季の節分あつひ吉凶又ハ朝の満干をを教べし右六歳より此所すて男女ともに教ふ

十年出就外傅 十年出外傅に就外に居宿し書計と學衣帛の襦袴を不禮初に師朝夕幼儀と學簡諒と請肄

計衣不帛襦袴禮師初朝夕學幼儀 計ハ算數をりて帛の襦袴と衣書ハ手跡をり計ハ算數をりて帛の襦袴と衣

請肄簡諒 十歳にも至ハ男子ハ正之師傳と擇外ハ出て居宿とて學べとて

十有三年樂 正しくれられ何れを我ををりて朝夕に容儀と學て幼少なるの抑をりてと知べ簡とは書物をり諒ハ物ごとと信實

學樂誦詩舞勺成童舞象學射御 十の年ハ音樂になつて詩と誦て勺の舞と學ぶ

二十而冠始 舞にうつるをり勺ハ仁義の道と勺をり象ハ征伐と象のにて文武二ツの舞をりて射藝馬術とと學ぶ

禮可以衣裘帛舞大夏惇行孝弟博

學不教内而不出

出さず

三十ふ而室と
有つ始て男事
と理む博學が
無。友に孫ふく
志心と視

四十始て仕物
に於て謀とと
出慮とと發し
道合べ則ら服従

不可なれば
去

五十命とて大
夫と為官政と
服す七十事と
致す

女子十年
出さ不姆婉婉
聽從と教麻桌
と執。絲。繭と治
り組と織紉と
組女事と學す
以て衣服に共す

天朝めて元服とさきて童子の髮容と改め
元で大人の衣服と加るるやかりて五禮を學
禮あり且帛裘の衣服とも着用し
音樂と文武とも大夏の舞とたり
大夏と人夏の大禹の舞るり分て惇く心
うけさる孝行の道と弟順る身持たり何を博く
學で胸中に徳と蓄心の存し積納て口に出さるべし
必自慢とあり人
師匠たるるを

事博學無方孫友視志
三十の年
人といふ室と有

方物出謀發慮道合則服従不可則
去
年四十俗諺とも思慮深し
物の大節に於て慮と研し謀と発し出さるべし
君の爲ふ忠と竭とさるるり道ふ合て君用るる
樂久しく服従ひし君いさめと用す聞不可と官
立去へし

五十命爲大夫服官政七
十致事
十と積む致事して老と中をふるる
その官職のものと君に致との意かり

不出姆教婉婉聽從執麻桌治絲繭
織紉組紉學女事以共衣服
女子十年

女子十年
出さ不姆婉婉
聽從と教麻桌
と執。絲。繭と治
り組と織紉と
組女事と學す
以て衣服に共す

女子十年
出さ不姆婉婉
聽從と教麻桌
と執。絲。繭と治
り組と織紉と
組女事と學す
以て衣服に共す

祭祀と觀て酒漿蘆豆菹醢と納禮相助奠と助於

十有五年而笄二十而嫁有

指圖がまうしやうぬらう四に從うりするやふ順ひ違ふ
るのるるささうの扱麻桌と執てつびを齒縹と非治て
紐織もつと冠さうの糾に組合るうて女子の事を
まらび得て衣服に共るるを覺らるる母の師匠也

觀於祭祀納酒漿蘆豆菹醢禮相助

奠先祖の祭祀とて觀祭奠物と奉中置夫の祭禮の相助

酒漿蘆豆菹醢汁等以上嫁後のたれにひ置十有五年而笄二十而嫁有

故二十二年而嫁年十五に至り笄蓄と以

十五ふのさうさうに縁組の約束いのれ并とさうさう
る天朝の齒黒の例る男子の冠同意童子
のそととさうさう并今のさうさうこれ
縁組とほひ約諾と定む故なり二十にさうさう

聘それ則り妻と奔則則り妻と為す妾と為す

曲禮曰幼子に常に視を立す

嫁入といつすありり父母のうら死去なりの故あれ
バ中三年と延引て婚禮とり結わり男子ハ二
十女子ハ二十と以て節とをなり男女とと夫まさで
に大抵人道の心得とあるられ女子の教と正るべい近頃
頃のぐ男子二十にさう女子十五六歳のれ婚禮と
作法をさらにて聘則為妻奔則為妾の
不均のいつらなり

女子の心得ありをさらにて媒約なりのり聘問縁糸等れ禮あり夫婦となりし妻といつなりりその
禮あり夫婦となりし妻といつなりりその
禮あり夫婦となりし妻といつなりりその
禮あり夫婦となりし妻といつなりりその

近來男子に幼少なりの教訓をさらにて用すて妻と
遊ぶ少なりのいつらなり

視母誼立必正方不傾聽の禮と記て曰

經典餘師

小學卷之一

六

舜契に命どく

曰く百姓親ま

不の五品遜へ不

作敬で五教と

敷めと寛に在

變に命どく曰く

汝典樂と命

直やと而して

濫寛うと而して

栗剛やと而して

無簡

みで而して傲と

無

男女と正て乱をなすぬと夫婦の別との老とると敬
ひ幼少と音るると長幼の序との交接と大切ふく

偽をく言とたぐぬと
朋友の信といふありとを

舜命契曰百姓不親

五品不遜汝作司徒敬敷五教在寛

右の如く五の倫と立るひきて舜帝をさして傳あり
ける百姓萬民の親まうらう五の品に遜ふたうられ

と敷をてこほべし人と教る自然と心とを易
寛示とてして大事なれと有り五の品とを命

曰命汝典樂教胥子直而濫寛而栗

剛而無虐簡而無傲
命帝已に契に司徒と

下に樂と典とを民に教させあり樂といふ人れ
の五の倫と品とを有らて教るゆひ五教といふ也

情と正とに道引かちけ親ませありの教といふ正直
に飾をささちありて又濫うあかち有る寛大と心

ひろくして内なる栗あるて手剛とたぐむと
いとも物の虐あるて物と簡すうらう

詩言

志歌永言聲依永律和聲八音克諧

無相奪倫神人以和
志と詩とのて詩と作

飛くといふと聲といふ聲の律呂に和して是
とて管絃糸竹八音の諧と倫とを調子とい

に相奪といふれは神明感通して人情
和とて親と睦とを致さうらう

周禮大司徒以郷三物教萬民而

賓興之
周公作周禮の書に萬民に教とて郷
大司徒の官あり郷飲酒と稱して郷

周禮に大司徒

郷の三物と以て

萬民と教て而して

賓興之

大司徒の官あり郷飲酒と稱して郷

て之と賓興と

の民聚るとして酒宴とあり年長と上座とありて孝

弟の道と教ふることをあり左に載る三の物と以て萬民と

教ふとてはなり郷飲の禮はその郷と治る大夫その

郷の學校とその郷に老人と賓客とて招くこと

事と興行 一日六徳 上は三の物に内 知物と

致さるし 仁 本心の徳として 聖 能世と并移る

仁の道と 忠 人の為るる心と 和 心と制して何事とも宜

く道ありめて無あり 忠 忠より出さるる心なり 和

言語容貞偏屈 二日六行 第二條の六 孝

友睦婣任恤 友 忠と契てあり 睦 九族とむら

父母にむら 友 忠と契てあり 睦 九族とむら

縁類と親 任 朋友とむら 恤 憐貧と以てが

ととなり 二日六藝 第三條の六の藝なり 藝と五穀と

あり 二日六藝 第三條の六の藝なり 藝と五穀と

三に曰く六藝禮

樂射御書數

禮 禮義 樂 音樂 射 射藝 御 馬術 書 書

數 筆數 數 以郷八刑糾萬民 上の三物と

教て擯する

能くさるる者い之と糾して刑といふことなり

として必殺するものにありハケ條にて罪の輕重とた

だるあり 一日不孝之刑 二日不睦之刑

とあり 三曰不嫺之刑 四曰不弟之刑 五曰

不任之刑 六曰不恤之刑 七曰造言

之刑 八曰亂民之刑 不孝の罪と第一

恤の五に擯 戾の二又造言とて奇妙不思議の

と造るらて人と偽りの二又亂民とて一の二と

立てた民とるほけ夫より正法と亂るものすべて

は勿余のれと糾明するは不任と不睦と不友と

一曰不孝之刑

二曰不睦之刑

三曰不嫺之刑

四曰不弟之刑

五曰不任之刑

六曰不恤之刑

七曰造言之刑

八曰亂民之刑

一曰不孝之刑

二曰不睦之刑

三曰不嫺之刑

四曰不弟之刑

王制に曰く樂正四術と崇て四教と立先王の詩書禮樂を順て以て士と造春秋以て冬夏の教を以て詩書と以て

弟子職に曰く先教と施て兄弟子思則り温恭自虚則り受る所是極む

るもの之兄より或るを弟より不躬
いそれうく虚むびささみとなり
王制曰樂

正崇四術立四教順先王詩書禮樂

以造士春秋教以禮樂冬夏教以詩

書古昔の學問と專一として人の才智を修りたて

司治をさるり禮記の王制の篇に樂記にて教訓を司掌官ありて四季に教ふるを詩書禮樂四の術と

崇やどるは詩經の教へ人情に通ず書經は聖人天下と治まひし道なり禮記は君臣尊卑父子

上下の叙限と示し樂經は弟子職に示しは慎んで是と則り先

施教弟子是則温恭自虚所受是極

弟子職に弟子の年長の人の或る道と小の先

善見て之を從ひ

義と聞て則り

服温柔子弟

驕てかど恃む

志虚邪母

行ふ正直と必

く游居常有

必ず有徳に就

居有常必就有徳

志母虚邪行必正直游

居有常必就有徳

志母虚邪行必正直游

顏色整齋中心必式夙興夜寐衣帶必飭

顏色整齋中心必式夙興夜寐衣帶必飭

朋友與交りり
言つて而して
信有る未と學未
と曰く雖も吾
必は之と學
譏ん未と學

記に凡人の己は賢なる善事あると見て之と賢と交
とて敬慕するその善と好まざる常心に
たゞるを以て夫と譬して色と好の心け如くその心
を好むは色欲を以て好むは義の心け如く善事
と好むは心すこれ間も一念の思ふに義あり
父母に事て己が力に心を以て君に事て己が
身は君に奉致し事あるは君の愛と大切にして
朋友又の博交會ふ就ては尤て信實となぐめ申す
言の約束なぐめを道とてかちの行れ人ありは假
令學問といふ事人かりといふも子夏の思ふに
まづと學問といふ事人かりといふも子夏の思ふに
謂ふは徳ありとて

小學卷之一終

小學卷之二

明倫第二

孟子の曰く庠序
學校と設爲して
以て之と教ゆ皆
人倫と明くする
所以也 聖經と稽
へ賢傳と訂此篇
と述以て蒙士と
訓也

明倫第二

第二の卷の明倫と明くする
えんが爲の事と記との義あり

孟子曰設爲庠序學校以教之皆
所以明人倫也稽聖經訂賢傳述

此篇以訓蒙士

孟子曰古昔聖徳の帝王天
下と治りて學校と設爲た

まひ教と施しよも人の倫と明くする有るを以て
所以あり庠序と學校の別名あり朱子之に擬する
今に聖人の經と稽へ賢人の傳る所と訂て教
訓と立ちて蒙人々と道引との思めしにて是れ
篇と述る
あり

内則曰子事父母雞初鳴咸盥漱櫛

母に事る雞初て
鳴て咸盥漱
櫛一維一筓總
髻と拂冠一綵
纓一端一鞞紳
笏と搢さし左右
用と佩偪一履
こいて綦と著

婦舅姑ふ事ふ
父母に事る如し
雞初て鳴て咸盥
漱一櫛一維一筓
總し衣し紳し左右

以て父母舅姑之
所不適所一及
氣下し聲と怡
痛苛癢と問て
而て敬を之と
抑搔出入則
或ハ先ながら或ハ後
而て敬を之と
扶持を

進盥少者盤
と奉は長者水と
奉て沃盥盥
請盥一平れ

縱筓總拂髻冠綵纓端鞞紳搢笏左
右佩用偪履著綦

子なるの父母に事るの
禮と速ありき雞の心
得めて鳴とさうり起るくと致さるると早朝ふとの心得
かり咸て手顔と盥漱それらうり髪下櫛といれ髻と
このあけ縫で筓簪とさうり先縮りてあひさく總ひくるり
次に髻のらうりと拂とさうり冠といさ結の纓と綵
さうり次うり表ふ玄端の衣と着し次ふ膝の鞞とい
きし紳帶とさうり次ふ手と持所の笏と紳とさ
ひあり笏の覺書け為さうり次ふ腰の左右に小道具と
い袋と佩て尊者の用事ふさうり為さうり次ふ足
先とさうり膝まで至るのと偪といさ次ふ
履とさうり其其糸むさび着とさうり

如事父母雞初鳴咸盥漱櫛維筓總
衣紳左右佩用衿纓綦履

女子の人の婦
以て父母舅姑之
所不適所一及
氣下し聲と怡
痛苛癢と問て
而て敬を之と
抑搔出入則
或ハ先ながら或ハ後
而て敬を之と
扶持を

姑之所及所下氣怡聲問衣燠寒疾
痛苛癢而敬抑搔之山人則或先或
後而敬扶持之

容身そのひて舅姑の所
適て相見ありさうり所
んとする時ハ氣と下つけて声と怡をに不勝るさうり
なり衣類の燠寒と問て老躰の疾痛へさうり又
身に苛癢の所あるや有は敬して癢と搔つさうり所
と抑さうりさうり扱父母ふつさうりひて或ハ先
と後ふ在て扶持

進盥少者奉槃長者奉
水請沃盥盥平授巾

盥水と一少の禮ハ少
年ある者槃と奉出

巾と授く

欲る所と問て而して敬んで之と進色と柔け以之と温て父母舅姑必之と嘗て而して後に退る

男女未冠冠一笄也未者ハ鶏初て鳴て咸盥漱櫛總角

纓と衿で皆容臭と佩味爽みて而して朝

年長の者ハ水と奉るこころありまて舅姑にひきて沃盥めく講のぐと盥て卒多ハ巾といひてまけ授く

問所欲而敬進之柔色以温之父母

舅姑必嘗之而後退 次ハ父母の食飲イ欲る所と問たれ

敬てその品と進るあり顔色と柔和めていふも温く父母の心さうて見えて父母これと嘗くもひく

後たら退るの義こころあり 男女未冠笄者 各々食古又いふるあり

雞初鳴咸盥漱櫛總拂髦總角 男女と童兒

こころ未冠笄といふ者ハ禮あり上ハ速く如く髦とら拂て左右へうけ二所て總とらひて束

とくに致あり 衿纓皆佩容臭味爽而朝

さて容儀み與る飭物といふ香囊み臭とほけて未明り父母のさかんとうるふあり早朝の勤

問何食飲矣若

已食則退若未食則佐長者視具 朝

何と問て食飲と問て若未食則佐長者視具

凡内外雞初鳴咸盥漱衣服歛枕簟灑掃室堂

初鳴咸盥漱衣服歛枕簟灑掃室堂

及庭布席各從其事 内外を召使下男下女

て顔と盥と漱と衣服とさうて夫より上る者の枕簟席と歛かづけ室堂の中并庭等と掃除

け夫より女ハ内の子まかり男ハ外の用前と記

各々その職ふ從て

父母舅姑將坐奉

將何郷席と
 奉て何郷の郷を
 請將社長と將
 長者席と
 奉て何郷の郷を
 請少者牀と執
 て坐と與御者
 凡と舉席と簞與
 筵と簞と歛めて
 而して之と獨之
 父母舅姑之衣
 衾簞席枕几傳
 不杖履祇念之
 敬一敢て近くと
 勿敦牟厄匱餃
 非に非に敢て用る

席請何郷將社長者奉席請何趾少
 者執牀與坐御者舉几歛席與簞縣
 衾筵枕歛簞而獨之
父母舅姑何方をも
半一めんをば兩手に
 席と奉て何郷の郷を又寐るんとして社
又朝起る時ハ安坐する牀と與て御者役ハ几案
と手にとり舉てまのてさそ席と簞ととり歛けて
 衾と掛木に引懸枕と筵ふ入簞
と獨之歛めて
 父母舅姑之衣
 衾簞席枕几不傳杖履祇敬之勿敢
 近敦牟厄匱非餃莫敢用與恒飲食
 非餃莫之敢飲食
右衾簞席枕几傳入用の
品ハ所と定め外ハ傳わく

莫與恒の飲
 食餃非恒之
 敢て飲食すと
 莫
 父母舅姑之所
み在于之と命を
對進退周旋慎
齊を
 升降出入揖
 遊敢て噓噫
 寔咳欠伸跛
 倚睨視セ不
 敢て唾痰セ不
 寒之敢て襲セ不
 廢も敢て搔セ不

杖履と尊者の朝暮ふ手あり物也祇敬て遊々
 しく汚るを敢れ敦牟厄匱のたへハ尊者の餃といふ
 時の外ハいさうふ用ひさうと與びハ尊者の常の飲食ハ
 子婦さるの食申すまはた餃乃外ハ飲食つてなまはさ
 尊者と父母
 其の外ハいさうふ用ひさうと與びハ尊者の常の飲食ハ
 子婦さるの食申すまはた餃乃外ハ飲食つてなまはさ
 尊者と父母
 ○在父母舅姑之所
出さる事ハ應く唯といふ敬て對と
いさう進退周旋まはた慎齊を
 升降出
 入揖遊不敢噓噫噫咳欠伸跛倚睨
 視不敢唾洩
階級の升降と門の出入をけて
禮儀の進退を揖を退る
身と遊て立退る
伸とあり跛倚といふ一睨視といふも無礼あり唾つと
 寒不敢襲廢不敢搔不有敬

敬事有不敬者
祖禡不涉不
擻不。藪の衣衾
裏と見と不。父母
の唾洩へ見と不。
冠帯垢つひら灰と
和して漱んと請
衣裳垢つひら灰
と和して漱んと
請衣裳綻び裂
れハ箴ふ紉して
補ひ綴んと請
少長事賤貴
小事共時に
帥ふ

事不敢祖禡不涉不擻藪衣衾不見
裏父母唾洩不見冠帶垢和灰請漱
衣裳垢和灰請澣衣裳綻裂紉箴請
補綴 寒氣の時とくど敢て衣服と藪るる身
そのうちわらわらるる事の敬ふのである事
礼をたたく射礼等のたたく水も涉みぬれば
衣裳と擻るる肌藪るる衣表裏と見らるる
いへまじりたり父母の唾洩等ハとやふとて見
てハ冠帯を垢つひら灰水に和して漱むるハ
衣裳と澣も同前あり綻び裂れハ箴ふと以て
補綴す
少事長賤事貴共帥時 年少
年長事賤の身めて貴人ノ事少くも共
時礼に帥あるるハ父母舅姑ノ限なく

曲禮曰凡為人の子
子為之礼冬温
して而夏清
し昏定めて而
て晨省する

○曲禮曰凡為人の子之禮冬温而夏
清昏定而晨省 凡て子の親あつたるの礼は
如く冬ハ父母の寒氣に
朝暮氣をつけ夏ハ清きと心かけ昏ハ能く
あまやと見定てある晨ハ夜分の様体いへ有
と安否と見定てある第一の義なり

出必告反必面
に必を面す遊所
必を常有習所
必を業有恒の言
老と稱せ不

出必告反必面所遊必有
常所習必有業恒言不稱老 用事ありて
時ハ何用ふ付て何方と告申べし又反必父母
に面し必を面す又外に遊留いへ常定ま
そ有て父母れとつらかりたり平生ハ何を心
けとて六藝の内と習ひ常此業といへ又恒
々の言語も老輩めたる事稱まはるる老と
ものといへるまじり又ハ人手とりて已が身ハ女逸とて

礼記曰孝子
之深愛有者ハ

○禮記曰孝子之有深愛者必
礼記曰孝子之有深愛者必

必有和氣有和氣
有者必有愉色有
愉色有者必有
婉容有

孝子王と執が如く
盈と奉るが如く洞
洞屬屬然として
勝弗が如く將之
と失之と將が如く

嚴威儼恪親
事所以非也

曲禮曰凡人の子
為者居に與ふ王
不坐さるる席
に中せ不行ふ中

不立に門の中
に不

食饗饗と為不
祭祀尸と為不

聲無小聽形無
視高に登ら不深
臨ま不苛と訾
不苛と笑は不
於助字

有和氣有和氣者必有愉色有愉色

者必有婉容 凡て孝心ありて深父母と愛し慕ふもの
ハ必温和ありて言語容負あるるを言ふ

孝子如執玉如奉

盈洞洞屬屬然如弗勝如將失之 子の親を奉るるの時の宝玉と手にとり持ておとく又
ハ物とりり盈する器と奉る如くあれとの心なる措かれ
うに如や之ととり落し失
えと將が如く心を用いし

嚴威儼恪非所以

事親也 親と大切重なるはうとくも餘み嚴しく
威ありまわく又ハ儼く恪く深きことなり

曲禮曰凡人の子

為者居に與ふ王

不坐さるる席

に中せ不行ふ中

不立に門の中

に不

食饗饗と為不

祭祀尸と為不

聲無小聽形無

視高に登ら不深

臨ま不苛と訾

不苛と笑は不

於助字

有和氣有和氣者必有愉色有愉色

者必有婉容

孝子如執玉如奉

盈洞洞屬屬然如弗勝如將失之

嚴威儼恪非所以

事親也

曲禮曰凡人の子

為者居に與ふ王

不坐さるる席

に中せ不行ふ中

不立に門の中

に不

食饗饗と為不

祭祀尸と為不

聲無小聽形無

視高に登ら不深

臨ま不苛と訾

不苛と笑は不

於助字

不中門

不中席

不中道

不立

不坐

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

不為

</

孔子曰父母在不遠遊遊必有方

曲禮子曰父母存不許以死

禮記子曰父母在不敢私其財

有也示以也

父母在饋獻不及車馬不專也

內則子曰子婦之孝者敬者父母舅姑之命逆也勿合心也勿

父母よりたまひて身あるれば必を大妨にいて父母の心
危き致べし苟且一人と訾笑をくさるなり人
るは又我とあるなり父母と輕しむるなり慎むべし

○孔子曰父母在不遠遊遊必有方

父母とひくし身はた父母の心と安堵をさし第一
一と遠方へはくし遊居はくし第一遊と方
角と定めてその所を
○曲禮曰父母存不

許友以死 父母世ありて命とすて死と遂はくし朋友
を許して命とすて死と遂はくし朋友
第一義あり武家の者旅をく出て同役のりれを

見殺しはくし
類あるす
○禮記曰父母在不敢有

其身不敢私其財示民有上下也

在の内にありて我身とまがものと思ふまうくありふ
事は父母のその故よりその戮ふるなりあり有と
はくまうにまがものとするありたり金銀財宝を私ふは
はくまうに上り立る御方よりはくまうに上り下り

立の心得と万民
示民不敢專也 父母在饋獻不及車馬
又上り方獻上ののといふ

○內則曰
子婦孝者敬者父母舅姑之命勿逆

勿怠若飲食之雖不嘗而待加
之衣服雖不欲必服而待加之事人

代之已雖不欲姑與之而姑使之而

父没而而... 父之書と讀... 澤存也爾馬

内則曰父母... 婢子若庶子... 愛雖父母没不衰

衰不馬... 視之也... 衰不馬

子甚其妻... 宜其妻... 夫婦之禮焉

盛の道の疏節なり。此孝行 父没而不能讀父

之書手澤存焉爾母没而杯圈不能

飲焉口澤之氣存焉爾

のの父の書とめとるの讀に... 父の氣と存に

○内則曰父母有婢子若庶子庶孫

甚愛之雖父母没没身敬之不衰子

有一妾父母愛一人焉子愛一人焉

由衣服飲食由執事母敢視父母所

愛雖父母没不衰

母寵愛したるた... 二人の妻あり

一人を愛したる... 二人の妻あり

一人を愛したる... 二人の妻あり

子甚宜其妻父母不悅出子

不宜其妻父母曰是善事我行夫

婦之禮焉没身不衰

父の氣に... 父の氣に

て衰へ不馬

曾子の日孝

其心と樂す
其志に違不
其耳目と樂す
其寢所と安
其飲食と以
て之と心養す

是故に父母之
愛する所亦之
と愛父母之敬
する所亦之と

ほふるなり、我が心にまゝに、
すくも夫婦の禮にまゝに、
衰へぬ、未世の心、
誠にまこれ、
一条、
不埒の至り

○曾子曰孝子之養老也樂其心不

違其志樂其耳目安其寢處以其飲

食忠養之

父母の目耳の心づゑ、
養ふ、
安堵、
一條、
道、
重、
なり

是故父母之所愛亦愛之父母之所

敬亦敬之至於犬馬盡然而況於人

乎

敬す、
犬馬、
至、
盡、
然、
而、
況、
於、
人、
乎

敬す、
犬馬、
至、
盡、
然、
而、
況、
於、
人、
乎

敬す、
犬馬、
至、
盡、
然、
而、
況、
於、
人、
乎

敬す、
犬馬、
至、
盡、
然、
而、
況、
於、
人、
乎

敬す、
犬馬、
至、
盡、
然、
而、
況、
於、
人、
乎

敬す、
犬馬、
至、
盡、
然、
而、
況、
於、
人、
乎

敬す、
犬馬、
至、
盡、
然、
而、
況、
於、
人、
乎

敬す、
犬馬、
至、
盡、
然、
而、
況、
於、
人、
乎

敬す、
犬馬、
至、
盡、
然、
而、
況、
於、
人、
乎

内則に曰く舅
没べ則ち姑老
ぬ家婦の所の
祭祀賓客は
事毎に心姑
に請介婦は
家婦に請舅
姑家婦と使

○内則曰舅没
則姑老家婦所祭祀賓客每事必請
於姑介婦請於家婦舅姑使家婦母
怠不友無禮於家婦舅姑若使介婦

合心して母友て
冢婦に禮無
若介婦と使
敢冢婦に敵
稱するも母敢
並行不敢並
命せ不^敢並
坐せ不^於

凡婦私室に
適し命不^能
敢て退^不婦
將に事有^し將
大小必^次舅

姑に請^將舅^禮於^於

適子庶子祇を
宗子宗婦事
貴富の雖も
敢貴富を以て宗
子之家に入^不
車徒衆と雖も
外に舍^寡約と
以入^敢て貴
富と以て父兄
宗族に加^不於

曾子の曰く父
母之と愛せし喜
ふ^而して忘^弗
父母之と惡^ま

母敢敵耦於冢婦不敢並行不敢並

命不敢並坐舅世と没るの姑婦老ての
らひ冢子の婦々つて先祖の

祭祀毎事とも賓客のよてなり等とつてんとなり

又介婦の衆中の何事と冢婦にたぶ

顔と致さく舅姑の介婦召使するは

介婦と敵耦べし又冢婦と同様に並

行し介婦と並坐するは又立並て人に

の命つる凡婦不命適私室不敢退

婦將有事大小必請於舅姑舅姑の所作

大小舅姑にたつて致すなり舅姑の命

つてつては私室へ適て休息すべしと

より退^出○適子庶子祇事宗子宗婦

雖貴富不敢以貴富入宗子之家雖

衆車徒舍於外以寡約入不敢以貴

富加於父兄宗族小宗家の適子庶子の
の宗子にその宗婦に事べしなりた

別家のもれ富貴乃身にさすといふは格式と

以て宗子の家より置く人寡約し家

入り父兄宗族に○曾子曰父母愛之

喜而弗忘父母惡之懼而無怨父母

懼て而して怨
有は諫て而して
逆不

内則に曰く父母
過有は氣と下
色と怡がら聲
と柔以て諫諫
て若入不は敬と
起孝と起説と

則復諫説不
其罪と郷黨
州閭に得與ハ
寧孰諫やん父
母怒説不
て而して之と
孝心と起

有過諫而不逆父母愛りたるん子とるも
喜んて忘るべし

○内則曰く父母有過下氣怡色
柔聲以諫諫若不入起敬起孝説則
復諫不説與其得罪於郷黨州閭寧
孰諫父母怒不説而撻之流血不敢

疾怨起敬起孝父母過失あり氣と下
顔色怡悦く声と柔
母怒説不
て而して之と
孝心と起

曲禮曰
子之事親也二諫而不聽則號泣而
隨之子親につらへ申道はすにのべり
父母ありやたらあれバ再三諫すもきき
まら不聽入りてそのつらに露見にあり
母とらに逢るはつりかきやう、號泣衰
父母に隨順て一所せざるし、
同くべりて誠に天命のつら
所せり又至誠をほし
あつたひのつらありとぞ

冠者不擲行不翔言不惰琴瑟不御

父母有疾

父母有疾

言情不琴瑟
御せ不肉と
食して味と變
ずるに至不酒
と飲で貌と
變するに至不
笑て矧に至
不怒て詈言に
至不疾止バ
故に復す

食肉不至變味飲酒不至變貌笑不

至矧怒不至詈疾止復故

心得をのぐまふかくつとて子たるもの怒も
弟一義やり冠をいさたるもの身をくさるべ
いと擲よりせんづらふべからず行ふ翔やどろ
くつとつらふ言詈念情につたふとく琴その外
かりこれと御べうぐ肉食して味の變わらふ
食する心ちうぐらす酒のかさらの酔て變なや
どつら下大笑し矧のこもるなほいべいり
奴僕がりととらり怒るとあつと詈り大なる
声とちうぐらす孝心のはちせんにく
ちるべしと疾愈たすハ復常の如くせらるる
かすくさり、琴つとハ七弦がり瑟ハ二十五を
トナリ御しとらりくつらふとく琴瑟とものくつらり
天朝の琴とつらふ華と

○君有疾飲藥臣

先嘗之親有疾飲藥子先嘗之醫不

三世不服其藥

て而してつらになくする父母疾ある子まが嘗む下
又醫者いさむは是れ衆一なり平生き命
謙くハ上并とらるる謙くハちと疾病と治
とらるる聞とらるる孝心の進なりにはふ

○孔子曰父在觀其志父没

觀其行三年無改於父之道可謂孝

矣

子に父母いさむと敬なりと内なる志とを常
に父母いさむと敬なりと内なる志とを常
に父母いさむと敬なりと内なる志とを常

君疾有て藥と
飲べ臣先之と
嘗む親疾有て
藥と飲ば子先
之と嘗む醫ハ三
世すく不其藥
と服セ不

孔子の曰く父
在ハ其志と
觀。父没てハ其
行と觀三年父
之。道に改む
無孝と謂可
於矣

夫婦之親
 官備之
 也官備之則
 具備之君子
 之祭必身
 親之之蒞
 故有則人
 使可也也

致齊於外に散
 齊之日其
 居處と思
 笑語と思
 志意と思
 樂む所と
 者所と思
 三日乃ち其為

以備外内之官也官備則具備君子
 之祭也必身親蒞之有故則使人可

也先祖の祭ハくゞバ夫婦一同に親ク祭ベシト
 也ハ内野ハ外ニシテ内ニシテモ亦所以ナリ

致齊於内散齊於外齊之日思其居
 處思其笑語思其志意思其所樂思

其所者齊三日乃見其所為齊者祭

之日入室儼然必有見乎其位周還

出戶肅然必有聞乎其容聲出戶而

聽愾然必有聞乎其嘆息之聲祭義の篇

に齊する所の
 者に見祭之
 日室に入儼然
 必其位
 見と有周還
 出と出ハ肅
 然とて必其
 容聲と聞
 有と出て而
 聴愾然とて
 必其嘆息
 之聲と聞
 有於平

に先祖と祭に外の交りに七日の齊戒あり
 心の散やうあつて三日又心の内に
 齊戒とて七日の散齊のついでに
 祭の日より十日まで酒と飲ず葷の
 食や夫婦の配耦ハ勿論といふの事
 心く心のちけぬといふやりの後の三日ハ親の
 姿と思或ハその親の常に居處所ハあり
 常に樂好たすといふ味に嗜たまふ等の
 と思出し心と法とみ父母在世のまこと
 思や三日の齊戒とてありな
 父母のまことを見まことと齊と為し
 とは父母とていふかのやうな祭の當
 日その神靈ともいふ室とてありな

是故先王之王之孝也。色不忘乎目，聲不絕乎耳。是誠の有りたり。周還してその室の戸と出るとして、身に肅然として、其の聲容と聞かざる。愾然に嘆息に声するや、にちやん。

王の孝也。色不忘乎目，聲不絶乎耳。先王の孝道と、祭と、志者欲不忘乎心。志者欲、心に忘るべからず。

心志者欲不忘乎心。先王の孝道と、祭と、志者欲、心に忘るべからず。

致愛。又常に父母の心志を忘るべからず。致愛、又常に父母の心志を忘るべからず。

則存致愬則著著存不忘乎心。夫安。常は父母の心志を忘るべからず。

得不敬乎。常は父母の心志を忘るべからず。

曲禮曰君子雖貧。敬せざるや、なり。

不粥祭器雖寒不衣祭服爲官室不。君は子、そのた、貧く困窮に至ると、粥を食ふべからず。

斬於丘木。君は子、そのた、貧く困窮に至ると、丘に於て、木を斬るべからず。

王制曰大夫。祭器不假。祭器、人に假らざるべし。

祭器未成不造。燕器、未だ成らざるべし。

孔子曾子曰。身體髮膚受之父母不敢。孔子、曾子、曰、身體、髮膚、受之、父母、不敢、

謂曾子曰。身體髮膚受之父母不敢。謂、曾子、曰、身體、髮膚、受之、父母、不敢、

謂曾子曰。身體髮膚受之父母不敢。謂、曾子、曰、身體、髮膚、受之、父母、不敢、

謂曾子曰。身體髮膚受之父母不敢。謂、曾子、曰、身體、髮膚、受之、父母、不敢、

謂曾子曰。身體髮膚受之父母不敢。謂、曾子、曰、身體、髮膚、受之、父母、不敢、

謂曾子曰。身體髮膚受之父母不敢。謂、曾子、曰、身體、髮膚、受之、父母、不敢、

是故先王之王之孝也。色不忘乎目，聲不絶乎耳。志者欲不忘乎心。志者欲、心に忘るべからず。

曲禮に曰。君子雖貧。敬せざるや、なり。

王制に曰。大夫祭器不假。祭器、人に假らざるべし。

孔子曾子曰。身體髮膚受之父母不敢。謂曾子曰。身體髮膚受之父母不敢。

孔子曰父母生之績莫
大焉君親臨之厚莫重焉

是故不愛其親而愛他
人者謂之悖德不敬其親而敬他人

者謂之悖禮

孝子之親也事
居則其敬也致
養則其樂也

致病則其憂
喪則其哀祭則其
樂也

親に事ふ者ハ
上に居て驕不
下と為て亂不

醜に在て争ハ
上に居て而驕
則十下と為て而

亂ハ則刑す醜
に在て而争ハ
則兵す三者の者

孔子曰父母生之績莫
大焉君親臨之厚莫重焉
是故不愛其親而愛他
人者謂之悖德不敬其親而敬他人
者謂之悖禮
孝子之親也事
居則其敬也致
養則其樂也
致病則其憂
喪則其哀祭則其
樂也

孔子曰父母生之績莫
大焉君親臨之厚莫重焉

是故不愛其親而愛他
人者謂之悖德不敬其親而敬他人

者謂之悖禮

孝子之親也事
居則其敬也致
養則其樂也

致病則其憂
喪則其哀祭則其
樂也

親に事ふ者ハ
上に居て驕不
下と為て亂不

醜に在て争ハ
上に居て而驕
則十下と為て而

亂ハ則刑す醜
に在て而争ハ
則兵す三者の者

孔子曰父母生之績莫
大焉君親臨之厚莫重焉
是故不愛其親而愛他
人者謂之悖德不敬其親而敬他人
者謂之悖禮
孝子之親也事
居則其敬也致
養則其樂也
致病則其憂
喪則其哀祭則其
樂也

親に事ふ者ハ
上に居て驕不
下と為て亂不

醜に在て争ハ
上に居て而驕
則十下と為て而

亂ハ則刑す醜
に在て而争ハ
則兵す三者の者

孔子曰父母生之績莫
大焉君親臨之厚莫重焉
是故不愛其親而愛他
人者謂之悖德不敬其親而敬他人
者謂之悖禮
孝子之親也事
居則其敬也致
養則其樂也
致病則其憂
喪則其哀祭則其
樂也

親に事ふ者ハ
上に居て驕不
下と為て亂不

醜に在て争ハ
上に居て而驕
則十下と為て而

亂ハ則刑す醜
に在て而争ハ
則兵す三者の者

孔子曰父母生之績莫
大焉君親臨之厚莫重焉
是故不愛其親而愛他
人者謂之悖德不敬其親而敬他人
者謂之悖禮
孝子之親也事
居則其敬也致
養則其樂也
致病則其憂
喪則其哀祭則其
樂也

親に事ふ者ハ
上に居て驕不
下と為て亂不

醜に在て争ハ
上に居て而驕
則十下と為て而

亂ハ則刑す醜
に在て而争ハ
則兵す三者の者

孔子曰父母生之績莫
大焉君親臨之厚莫重焉
是故不愛其親而愛他
人者謂之悖德不敬其親而敬他人
者謂之悖禮
孝子之親也事
居則其敬也致
養則其樂也
致病則其憂
喪則其哀祭則其
樂也

除不バ日に三牲
之養と用と雖も
猶不孝と為也

孟子曰世俗に
所謂不孝者
者五其四支と

惜り父母之養
ひと顧と不一つ
不孝也博奕飲

酒と好父母之
養ひと顧不二の
不孝也貨財と

好妻子と私して
父母之養と顧
不二の不孝也耳

目之欲と從や
以父母之養と
為四の不孝也

勇と好鬪狼
以父母と危
五の不孝也

曾子の曰く身者
父母之遺體也
行ふ敢て敬せ不

ん乎居處莊
不孝に非る也
君に事して思ひ

不孝に非る也
官に莅て敬せ
不孝に非る也

朋友に信さず不
孝に非る也

朋友に信さず不
孝に非る也

滅亡に及ぶ道と甜刑罰に及ぶ人と争競バ兵
仗に及ぶべきなりと三の中はそのつぎの除く
ホして己が身に及ばばたぐ毎日山海の珍味を以て
父母と養育とのよも不孝の咎と久むるやう三牲
とハ牛羊豕の三の料理
なり七五三といふかぶり

○孟子曰世俗所
謂不孝者五

惜其四支不顧父母之
養一不孝也博奕好飲酒不顧父母

之養二不孝也好貨財私妻子不顧
父母之養三不孝也從耳目之欲以

為父母之戮四不孝也好勇鬪狼以
危父母五不孝也

○曾子曰身也
身體四支の安樂と好む物事に惜むる
竭して父母と養やふと顧ぶるの
傳奕の勝負と好む酒と飲やぐ父母の事と
るるの類又ハ貨財と好むとつるやう妻子
私の遊樂と事し又ハ人の目
音曲に取の驕るときら又ハ勇氣と好む鬪狼と
危に及ぶれ類なり

者父母之遺體也行父母之遺體敢
不敬乎居處不莊非孝也事君不忠

非孝也莅官不敬非孝也朋友不信
非孝也五者不遂裁及其親敢不敬

乎曾子の亦も凡あれ一身ハ父母より遺
たすりて然ハ父母の身体も同事され

經典餘而
小學卷之二

の孝に非ざる也
五の若遂不
其親に及
敢て敬せず

孔子の曰く五
刑之屬三
罪不孝より
大なる莫於

右明父子之親
と明す

誠に敬し、
禮儀を
朋友の交りに
戦争に臨んで
れし孝道に非
父母の耻辱
くさる敬む
孔子曰く五刑
之屬三
罪不孝より
大なる莫於
右明父子之親
と明す

禮記に曰く將
公所に適し將
外寢に居り
沐浴す史象
笏と進み思對
命と書既に服
して定容觀玉聲
と習乃ち出

禮記に曰く將
公所に適し將
外寢に居り
沐浴す史象
笏と進み思對
命と書既に服
して定容觀玉聲
と習乃ち出

曲禮に曰く凡君
為に使者を
君言家に宿不
君言至則必

禮記曰將適公所宿齊戒居外寢

沐浴史進象笏書思對命既服習容

觀玉聲乃出

使者已受命君言不宿於家君言至

則主人出拜君言之辱使者歸則必

曲禮曰凡為君

使者已受命君言不宿於家君言至

則主人出拜君言之辱使者歸則必

曲禮曰凡為君

主人出迎君之辱者歸則必於門外送

若使人於君所則必朝服而受命之命受命者

并送于門外

又曲禮に曰く使者役を命と受て

若使人於君所則必朝服而命之使

者反則必下堂而受命

論語に曰く君若使

擯色勃如也足躩如也

論語に曰く君若使

揖所與立左右手衣前後襜如也趨

進翼如也賓退必復命曰賓不顧矣

内に入ると趨進してあむ

復命するや既に賓君の疾を顧

入公門鞠躬如也不容立不中

公門に入らば鞠躬如し

如立門
に中セ不行に
闕と履不也

位と避れば色
勃如なり足躩
如なり其言足
不都に似る也

齊と攝て堂に
屏ハ鞠躬如なり
氣と屏息息不
者に似る出で
一等と降ハ顔色
一程で怡怡如

其位に復ハ蹴踏
如なり也

禮記に曰く君
車馬と賜ハ乘
て以て賜ものと
并ナ衣服服一
てハ君未平有
不取
て即乘服セ弗也
未
曲禮に曰果の
君前賜ハ其核
有者ハ其核ハ懷
ろに君ハ御食
ハ君餘と賜ハ

門行不履闕公の御門に入るに及ばず闕公の御門に入るに及ばず

過位色勃如也位を過ぐれば色は勃然とす

足躩如也其言似不足者言の似る不足者

攝齊外堂鞠躬如也屏氣似不息者外堂に鞠躬するに似る

出降一等逞顔色怡怡如也沒階趨階を降りて顔色が怡然とす

翼如也復其位蹴踏如也翼の如き形に復して蹴踏するに似る

○禮記曰君賜車馬乘以拜賜

衣服服以拜賜君未有命弗敢即乘

服也君の賜る衣服を拜して服する

○曲禮曰賜果於君前其有核者懷

其核御食於君君賜餘器之斂者不

寫其餘皆寫果の類と君の斂てたもの時

謂善と陳邪と
謂之と敬と謂
吾君能なく之
と賊と謂

官守有者其
職と得ん
去言責有
者其言責
得ん

王蠋曰忠信
事不烈

女ハ二夫と更
不

右明君臣之義
と明す

曲禮曰男女
行媒有に非れ
名と相知不幣
と受に非れ交
不親ま不

君謂之恭陳善閑邪謂之敬吾君不
能謂之賊

者不得其職則去有言責者不得其
言則去

王蠋曰忠臣不事二君烈女不更
二夫

右明君臣之義
曲禮曰男女非有行媒不相知名非
受幣不交不親

君謂之恭陳善閑邪謂之敬吾君不
能謂之賊

能謂之賊

者不得其職則去有言責者不得其
言則去

王蠋曰忠臣不事二君烈女不更
二夫

右明君臣之義

曲禮曰男女非有行媒不相知名非
受幣不交不親

受幣不交不親

曲禮曰男女非有行媒不相知名非
受幣不交不親

受幣不交不親

曲禮曰男女非有行媒不相知名非
受幣不交不親

受幣不交不親

曲禮曰男女非有行媒不相知名非
受幣不交不親

受幣不交不親

曲禮曰男女非有行媒不相知名非
受幣不交不親

受幣不交不親

曲禮曰男女非有行媒不相知名非
受幣不交不親

受幣不交不親

曲禮曰男女非有行媒不相知名非
受幣不交不親

受幣不交不親

曲禮曰男女非有行媒不相知名非
受幣不交不親

故に時月以て君に告齊戒以て鬼神に告酒食と為て以て郷黨僚友と敬以て其別と厚する也

妻と取に同姓と取不故に妻と買に其姓と知不べ則之と

上昏禮に曰く

に謹していそぐべしこれゆゑ納幣と受らる故日

月以告君齊戒以告鬼神為酒食以

召郷黨僚友以厚其別也右の男女の道ハ私のけし

召非中昏禮の服と時月と主君に告めが

酒宴食事とありけり郷黨僚友と厚する

取妻不取同姓故買妾不知

其姓則卜之妻と取むるは一家の大事

杖刻に不取同姓といふは血脉つかり家

○士昏

禮曰父醮子命之曰往迎爾相承我

宗事最帥以敬先妣之嗣若則有常

儀禮の書に士の昏禮と記する所にいふ

今在迎て爾の相とせんべし子曰諾唯恐

弗堪不敢忘命子の命と許諾して

女命之曰戒之敬之夙夜無違命母

施衿結帨曰勉之敬之夙夜無違官

子の日諾唯恐

父女と送て之

戒之敬之夙夜無違命母

禮と結て曰く。之れと勉之れと敬。夙夜宮事に違ふ無。

庶母門内に及んで擧と施し之れに申に父母之命と以て之れに命と曰敬恭と聽て爾の父母之言と宗と夙夜愆と無と諸に於擧と視。禮記に曰夫昏禮ハ萬世之始也異姓に取

事。婚の我家と出づるの父見送て命つらる。戒り敬とて朝夙夜いふまふいふまをいひて舅姑の命に違ふなれとやう。父母の親祭と施し。くはて禮と結つる禮ありて曰やうに。くは内にあつて宮の事と勉むる第一義ありとく敬むるぞ

庶母及門内施擧申之以父母之命。命之曰敬恭聽宗爾父母之言夙夜

無愆視諸衿擧。父母の言と宗と夙夜に愆らるるをく申く。父母の言と宗と夙夜に愆らるるをく申く。父母の言と宗と夙夜に愆らるるをく申く。

禮萬世之始也取於異姓所以附遠。○禮記曰夫昏

厚別也幣必誠辭無不腆告之以直

信。その説ハ駢く一カガ義理の明ハ男姑の別ハ遠に附く執おこまんと為。幣ハ飾り。誠ありと主とするやうに定まり辭遣ありうの氣さう。

也信婦德也一與之齊終身不改故。信實正直の道辭。一カガ義理の明ハ男姑の別ハ遠に附く執おこまんと為。幣ハ飾り。誠ありと主とするやうに定まり辭遣ありうの氣さう。

夫死不嫁。能つよぶ。依て婦人の徳と信とつらう。夫婦齊く與にまゐりて終身まゐりて改めざらう。

男子親迎男先於女剛柔之義也天先乎地君先於臣其義

男子親迎。剛柔之義也。天先乎地。君先於臣。其義。男子親迎。男先於女。剛柔之義也。天先乎地。君先於臣。其義。

及百里而犇喪事無擅為行無
 喪不事擅為無行獨成無
 參知而後動驗可也而後
 後言晝庭以遊不夜行以火
 以婦德正所以也乎

子不取世刑人有取不世
 惡疾有取不人喪長子
 取不

婦に七去有父母に順は不
 去子無主淫去如去
 惡疾有去多言去竊盜去

内不百里而犇喪事無擅為行無
 成參知而後動可驗而後言晝不遊
 庭夜行以火所以正婦德也

内不百里而犇喪事無擅為行無
 成參知而後動可驗而後言晝不遊
 庭夜行以火所以正婦德也
 門事之日也百里之道也
 喪事之也百里之道也
 行於獨成之事也
 何也身之舉動也
 參談合也知也後也
 驗也
 晝也夜行也
 所也火也
 祭也婦人の徳と正也

女有五不取逆家

子不取亂家子不取世有刑人不取

世有惡疾不取喪父長子不取

第一に逆家とす不忠不孝不道に逆
 家つれ第二に世に刑にあひ人第二世を願ふ
 等の惡疾に之をとり家第四父喪長子つとす
 是の教とる所なり第五淫亂不義身と
 乱る家これ等なり此内は逆家の子に
 取らざるなり其の論のあり

婦有七去不順父母去無子去淫去妬去有

惡疾去多言去竊盜去

第一に父母の意に順はざるは
 第二に子に無主の去は
 第三に淫亂の去は
 第四に妬の去は
 第五に惡疾の去は
 第六に多言の去は
 第七に竊盜の去は

三の去不有。
取所有て歸
所無に去不有
年の喪に與り
更去不前
貧賤めて後に
富貴やると去不
凡此聖人男女
之際と順あり
婚姻之始と重
なる所以也

曲禮に曰く。寡
婦之子は見し
有に非れど與ふ

友と為弗焉

右夫婦之別
と明す

孟子の曰。孩提
之童も其親と
愛ふると知不
無其長きに及
で其兄と敬すと
知不し。無徐に
行て長者に後
之と弟と謂疾
行て長者に先
之と不弟と
謂也

經曰。余市

内父母に順するは誠に去るべきなり。その餘は教等の

有_レ三_レ不_レ去_レ有_レ所_レ取_レ無_レ所_レ歸_レ不_レ去_レ

與_レ更_レ三_レ年_レ喪_レ不_レ去_レ前_レ貧_レ賤_レ後_レ富_レ貴_レ不_レ

去_レ凡_レ此_レ聖_レ人_レ所_レ以_レ順_レ男_レ女_レ之_レ際_レ重_レ婚_レ

姻_レ之_レ始_レ也_上 去べしぬ義理なり。第一は父母とくひは妻

家より去るは第一は父母とくひは妻

にけり。舅姑の喪とて終りぬ。去す。第三

にけり。此が去るは時ハ身主ハ身かん苦勞

にけり。妻とむるは後ハ富貴にやゆとあり

別とた。婚禮と重なる。間。曲

禮曰。寡婦之子非有見焉弗與爲友

右明夫婦之別 夫婦の道ハ第一なり。道

孟子曰。孩提之童無不知愛其親及

其長也。無不知敬其兄也。徐行後長

者。謂之弟。疾行先長者。謂之不弟。

孩提の童は親を愛ふると知不し。兄を敬ふると知不し。

疾行して長者に先ずるは弟と謂ふ。疾行して長者に後にするは不弟と謂ふ。

不弟と謂ふは禮義にそむる人ハ弟に順とたむるなり。

經曰。余市

則必手長者
の視所に郷

郷に坐す長者の視所に郷
郷に坐す長者の視所に郷
郷に坐す長者の視所に郷

長者之與提攜
長者之與提攜

長者之與提攜
長者之與提攜

長者之手と奉
長者之手と奉

長者之手と奉
長者之手と奉

負劔辟咄詔之則掩口而對
負劔辟咄詔之則掩口而對

負劔辟咄詔之則掩口而對
負劔辟咄詔之則掩口而對

之に知詔則ち
之に知詔則ち

之に知詔則ち
之に知詔則ち

如く少者の
如く少者の

如く少者の
如く少者の

凡長者の爲に
凡長者の爲に

凡長者の爲に
凡長者の爲に

糞はく之の禮必
糞はく之の禮必

糞はく之の禮必
糞はく之の禮必

加袂と以て拘
加袂と以て拘

加袂と以て拘
加袂と以て拘

而扱之
而扱之

而扱之
而扱之

將即席容母
將即席容母

將即席容母
將即席容母

作兩手摠衣去齊尺
作兩手摠衣去齊尺

作兩手摠衣去齊尺
作兩手摠衣去齊尺

衣母撥足毋蹶
衣母撥足毋蹶

衣母撥足毋蹶
衣母撥足毋蹶

先生書策琴瑟
先生書策琴瑟

先生書策琴瑟
先生書策琴瑟

在前坐而遷之
在前坐而遷之

在前坐而遷之
在前坐而遷之

戒勿
戒勿

戒勿
戒勿

正爾容聽必恭
正爾容聽必恭

正爾容聽必恭
正爾容聽必恭

毋勦說
毋勦說

毋勦說
毋勦說

母雷回必則
母雷回必則

母雷回必則
母雷回必則

古昔稱先王
古昔稱先王

古昔稱先王
古昔稱先王

遷
遷

遷
遷

安
安

安
安

爾
爾

爾
爾

正
正

正
正

恭。勤說する。母雷同。母必。則先王と稱す。

先生に待坐して。先生問。終。則對。業。請。則起。益。請。請。則起。益。請。

尊客之前に。狗と叱。不。食。讓。侍坐。君。子。欠。伸。杖。履。視。日。蚤。莫。侍。坐。者。請。出。矣。

杖履と撰。日の蚤莫と視。侍坐する者。出。請於矣。

君子に待坐して。君子問。更。端。則起。而對。君子。侍坐して。若。告。者。有。少。間。願。有。復。則。左右。に。屏。而。待。也。

長者に待飲。酒進。則起。尊所。起。

君子に待坐して。君子問。更。端。則起。而對。君子。侍坐して。若。告。者。有。少。間。願。有。復。則。左右。に。屏。而。待。也。

長者に待飲。酒進。則起。尊所。起。

起。尊所。起。

經典餘師

これなまらけり。言語の時。長者の言。及。容兒。人の言。語と聽。又人の言。我が。言。響。先代の聖王の時。言語。古昔と法。先代の聖王の時。侍坐於先生。先生問。焉。終。則。對。業。請。益。則。起。先生の。則。侍坐。學問の。業と。請。益。則。起。先生。尊客之前。不。叱。狗。讓。食。不。唾。侍。坐。於。君子。君子。欠。伸。撰。杖。履。視。日。蚤。莫。侍。坐。者。請。出。矣。尊客。の家。に。飼。狗。水。犬。と。叱。の。に。け。り。容。よ。食物。と。あり。た。ま。り。時。に。唾。と。け。り。ふ。ち。君子。の。坐。に。侍。て。あ。る。君。子。欠。伸。し。て。杖。履。と。撰。し。日。の。蚤。莫。と。視。の。に。け。り。氣。と。つ。も。視。ま。つ。と。坐。と。起。て。退。出。と。ひ。ふ。べ。し。君子。の。休。息。安。坐。し。て。坐。と。起。て。退。出。と。ひ。ふ。べ。し。

侍坐於先生。先生問。焉。終。則。對。業。請。益。則。起。

尊客之前。不。叱。狗。讓。食。不。唾。侍。坐。於。君子。君子。欠。伸。撰。杖。履。視。日。蚤。莫。侍。坐。者。請。出。矣。

君子。君子。欠。伸。撰。杖。履。視。日。蚤。莫。侍。坐。者。請。出。矣。

侍坐。君子。君子。問。更。端。則。起。而。對。侍。坐。於。君子。若。有。告。者。曰。少。間。願。有。復。也。則。左。右。屏。而。待。

侍飲於長者。酒進。則起。拜受於尊所。長者辭。少者。反。席。而。飲。

侍飲於長者。酒進。則起。拜受於尊所。長者辭。少者。反。席。而。飲。

侍飲於長者。酒進。則起。拜受於尊所。長者辭。少者。反。席。而。飲。

侍飲於長者。酒進。則起。拜受於尊所。長者辭。少者。反。席。而。飲。

經典餘師

三十三

右長幼之序と明す

右明長幼之序

年長と幼少のり序

曾子曰君子以文會友以友輔仁

曾子曰君子以文會友以友輔仁

孔子曰切切悃悃朋友之道

孔子曰切切悃悃朋友之道

孟子曰善朋友之道

孟子曰善朋友之道

子貢友と問孔子曰忠告而善之

子貢友と問孔子曰忠告而善之

孔子曰居是邦事其大夫之賢者

孔子曰居是邦事其大夫之賢者

益者三友損者

益者三友損者

携ふわきの老人といつて先づつ

年長と幼少のり序

曾子曰君子以文會友以友輔仁

孔子曰切切悃悃朋友之道

孟子曰善朋友之道

子貢友と問孔子曰忠告而善之

孔子曰居是邦事其大夫之賢者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

益者三友損者

三友直と友と諒と友と多問と友とするは益なり。便辟と友と善柔と友と便佞と友とすは損なり矣。

孟子曰。長と挾不貴と挾不兄弟と挾不而也友とす友也者其徳也。

曲禮に曰。君子人之歡と盡す。不人之忠と竭す。不以交と全する也。

凡客與人者。門毎に客に讓客。寢門に讓客。寢門に讓客。

者三友。友直。友諒。友多聞。益矣。友便辟。友善柔。友便佞。損矣。

信實にさすべし。三の學問の道は誠の道にす。信實にさすべし。三の學問の道は誠の道にす。

孟子曰。長と挾不貴と挾不兄弟と挾不而也。友とす友也者其徳也。

聖賢君子と友と。又當今の人徳あればその人の高下貴賤と。の老若と。あつむべし。長や短や。年と。徳あると。無意なるべし。と。長や短や。年と。徳あると。無意なるべし。と。長や短や。

曲禮に曰。君子人之歡と盡す。不人之忠と竭す。不以交と全する也。

凡客與人者。門毎に客に讓客。寢門に讓客。寢門に讓客。

讓於客。客至寢門。主人請入爲席。然

凡與客入者。每門

讓於客。客至寢門。主人請入爲席。然

拜主人問不
ハ客先舉不

主人より先客と慕ひて客より主人へ禮
とせんたり大抵主人より入来りけり
をうつる故に主人の問に
うらむ客より詞と舉るるもの

右朋友之交
と明す

右明朋友之交 朋友之交義あり
と明す

孔子曰く君
子之親に事て
孝故に忠君に
移可。口に事て
親故に順長
に移可。家に
居て理故に治
官に移可。是
故に行内に成
て而して名後世
に立於(矣)

孔子曰君子之事親孝故忠可移於
君事兄弟故順可移於長居家理故
治可移於官是故行成於内而名立
於後世矣 家にありて孝するの官に移り君に
事する道とつるを孝の外へ出て年長の人に順
なり家とつる理を以て官に移り政務とつ
るを孝の外へ出て年長の人の内に成
て而して名後世に立於(矣)

天子争臣七人
有ハ無道と雖
其天下と失不
諸侯争臣五人
有ハ無道と雖
其國と失不大
夫争臣三人有
ハ無道と雖
其家と失不
士争友有則
其身令名と
離不父争子
有ハ則身不義
に陷不故に不
義に當てハ則
子以父に争ハ
弗ある可く不
臣以て君に争

天子有争臣七人雖無道
不失其天下 諸侯有争臣五人雖無
道不失其國 大夫有争臣三人雖無
道不失其家 士有争友則身不離於
令名 父有争子則身不陷於不義 故
當不義則子不可以弗争於父 臣不
可以弗争於君 臣七人あり、三大臣と補弼
四人あり、七人のり此忠義あり、謙言争ふ
をやるものられ大抵天子の御身無道なり
諸侯の家にとり争ひせんなり 臣下五人あれ

樂共子曰。民生於三事之如一。父之教君之。君之食之。非父不生。非君不長。非教不知。生之族也。故一死報賜。以力。人之道也。

樂共子曰。民生於三事之如一。父之教君之。君之食之。非父不生。非君不長。非教不知。生之族也。故一死報賜。以力。人之道也。

晏子曰。君令臣共。父慈子孝。兄愛弟敬。夫和妻柔。姑慈婦聽。禮也。君令而不違。臣共而不二。父慈而聽。夫和而義。妻柔而正。姑慈而從。婦聽而婉。禮之善物也。

晏子曰。君令臣共。父慈子孝。兄愛弟敬。夫和妻柔。姑慈婦聽。禮也。君令而不違。臣共而不二。父慈而聽。夫和而義。妻柔而正。姑慈而從。婦聽而婉。禮之善物也。

妻柔めて而く
正しく姑慈みて
而く從婦聽や
て而く婉やうの
禮之善物也

曾子曰親戚
不說不敢外交
近者親ま
る不敢遠と求不
小者審か
不取大と説不
故に人之生百
歳之中疾病有
老幼有故に君
子其復可く不
者と思て而して
先施親戚既に
没して孝と欲と

雖誰か為に孝
せん年既に者サ
カハ悌と欲と雖
誰か為に悌せん
故に孝及不と
有悌時と不と
有其此之と謂
歟也馬

官に宦成に公忌病
ハ小愈に加り禍
ハハ懈惰に生る
孝ハ妻子に衰入
此四の者と察

経典余糸巾

べく夫の和して義理たゞく妻の柔くして正しく
身と持て一に姑婦の婦と愛慈て從か婦の舅
姑の仰とく聽て婉くうるべからり人かかやたわ
ハ人道の禮義よく善物あら上りるべしとくそ

○曾子曰親戚不說不敢外交近者
不親不敢求遠小者不審不敢言大
故人之生也百歳之中有疾病焉有
老幼焉故君子思其不可復者而先
施焉親戚既没雖欲孝誰爲孝年既
耆艾雖欲悌誰爲悌故孝有不及悌
有不時其此之謂歟

兄弟のまらり小説怡うれはるるを子細
その我つらるる行届きなき外人の交義と致
しつ厚を道にまらるるを又近付合ものよき親
かまの遠方まで交義を求むんし不時なり又
く我身にうる小を勤む審か行届ぬ身にとりて
大なるは口にうりてけり思や實や人の一生
ふ百歳にまらるるの中は疾病もあれ年の幼少
と老らるるは此間の數もあつたれ思にに
此間が身身の行義も第一一度り
て不可復といつて思て施しおろさるる父母
親戚既に世に没バ孝と盡さんと欲と誰に
せんや我年耆艾ぬるは弟の悌と致さんと
兄弟を兩親なくハ頭も及く何の道も
時節なり此之謂とるべし

○官
怠於宦成病加於小愈禍生於懈惰
孝衰於妻子察此四者慎終如始

終身録卷之二

四十六

